

令和 2 年 5 月 25 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02752

研究課題名(和文) 英語の間接指令構文の包括的認知言語学的研究

研究課題名(英文) A Comprehensive Cognitive Linguistic Analysis of Indirect Directive Constructions in English

研究代表者

高橋 英光 (Takahashi, Hidemitsu)

北海道大学・文学研究院・名誉教授

研究者番号：10142663

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、行為指示に用いられる英語の間接指令構文について動詞を中心とする包括的認知言語学分析を行った。その結果、(i)間接指令構文と命令文の間には使用頻度が高い動詞に共通点と相違点があり、tellはいずれの構文でも共通して使用頻度が高いが、letの使用頻度が高いのは命令文のみである、(ii)間接指令構文それぞれに異なる高頻度の動詞があるが、依頼型(Can you構文など)と提案型(Why don't構文など)には体系的な違いがある、第三に、「コストが高く応じる義務が低いほど指令表現のサイズは大きく遠回しになる」という当該研究者の仮説の妥当性が裏付けられる、という成果が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

指令行為(あるいは行為指示)はヒトのもっとも重要な言語コミュニケーションの一つであるが、従来の研究はケース・スタディー及び直感・作例に依存する分析が主流であった。このため「間接指令文とは命令文の丁寧な言い換え」という不十分な理解が蔓延していた。本研究は、英語の多様な間接指令文各々の使用頻度の高い動詞とその用法に着目し、異なる構文間には用いられる動詞の種類と用法に共通点のみならず微妙な差異があることを具体的データに基づいて示した。さらに英語の表現選択の包括的原理を提示した。これらの成果が英語学と行為指示研究にのみならず社会語用論、認知言語学、さらに言語教育にもたらす恩恵ははかり知れない。

研究成果の概要(英文)：In this research project, I have conducted a comprehensive cognitive linguistic analysis of indirect directive constructions in English, with a special focus on frequent verbs and their uses. The main findings include: (i) There are commonalities as well as differences between indirect directive constructions as a whole and the imperative regarding frequent verbs. The verb TELL, for example, is generally frequent in both indirect directives and the imperative whereas LET is frequent only in the imperative; (ii) While different indirect directive constructions tend to have different sets of frequent verbs, systematic differences can be discerned between request constructions (such as CAN YOU VP?) and suggestion constructions (such as WHY DON'T YOU VP?). (iii) All these findings provide support for the present researcher's earlier hypothesis that "The greater the cost and the lower the obligation the longer and more tentative a directive expression becomes." (Takahashi 2012).

研究分野：認知言語学 行為指示 発話行為

キーワード：行為指示 間接指令文 動詞の頻度 項構造

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

言語学・言語哲学の歴史では「真偽価値を持つ言語、つまり事実を述べる手段としての言語行為 (=断言など)」が重視されていた。一方でオースティン (Austin 1962) は実際の発話には「約束」、「命令」、「疑問」など真とも偽ともならない文が存在することを指摘し、発話行為論 (speech act theory) の基礎を作った。さらにサール (Searle 1979) は「発話内行為 (=何らかの効力を伴う行為)」を「宣言」、「指令 (行為指示)」、「約束」、「表出」の4種に下位分類した。発話 (内) 行為と統語構造は1対1の対応を示さない。このためある統語構造が「本来」の発話 (内) 行為を表現する「直接発話行為」とそれ以外の「間接発話行為」が区別される (高橋 2019a)。

当該研究者は、認知言語学の観点からの包括的な命令文研究 (Takahashi 2012) を行い、アメリカ英語のミステリー小説の会話の命令文 (総数 1774 例) の動詞を詳細に調査した。その結果、(i) 英語命令文では、let 's を除き、(1) tell 106, (2) let 105, (3) look 98, (4) come 78, (5) get 74, (6) take 64, (7) be 60, (8) go 55, (9) give 47 の順に頻度が高い、(ii) 命令文では tell と give が「動詞+1人称代名詞 (me/us)」構造をとる頻度が非常に高いが get や take ではこのような傾向が見られない、(iii) (ii) の「動詞+1人称代名詞」構造は「話者利益」 (=命令文のプロトタイプ) を喚起すること、さらに多義性が少ない動詞 (tell, let, give および believe, excuse, forgive, trust) に生じやすい (Takahashi 2012: chap.4)、(iv) 命令形の Tell me は談話構成標識として、look, listen, come は間投詞としてしばしば機能する、という成果を得た。さらに命令文 (=直接指令文) と関係の深い間接指令文 15 タイプの用例総数 113 例を収集・分析し、(v) 間接指令文の使用頻度は命令文の15分の1以下であり「命令文は丁重さに欠けるため使用を回避される」(Wierzbicka 2003) などの定説の不備を指摘し、(vi) 英語指令文の選択についての仮説「コストが高く応じる義務が低いほど指令構文はより長く遠回しになる」(“The higher the degree of COST and the lower the degree of OBLIGATION to comply, the longer and/or more tentative a directive construction becomes.”)、を提示した。

しかし以上の分析は、命令文中心の研究であり、当然ながら間接指令文の分析についてはデータ量と理論的考察が十分ではなかった。そこで当該研究者は 2013 年度より『英語の間接指令構文の認知言語学研究』(日本学術振興会科学研究費基盤研究(C) (研究代表: 高橋英光 課題番号: 25370540) を開始した。この研究から、(i) 英語の間接指令文 (15 種) の相対的使用頻度は (1) can you 型 (2) why don 't you 型 (3) I want you to 型 (4) will you 型 (5) would you (6) could you、の順に高く、I wonder if you 型、I 'd appreciate it if you 型、Would you mind 型などは使用頻度が低いこと、(ii) 動詞 tell は命令文だけでなく多くの間接指令文でも高頻度だが、個々の間接指令文により高頻度の動詞とその用法に差異がある、(iii) can you では (命令文で豊かな) 間投詞や談話構成の用法が乏しく、動詞 (例えば tell) の優先的項構造が異なり、命令文なら “TELL [Oi: NP][Od: that-clause]” 構造 (e.g. Tell your mother I 'll see her tomorrow.) の頻度が一番高いが、can you 構文ではこの構造は 0 件であり “TELL [Oi: NP][Od: wh-clause]” 構造 (e.g. Can you tell me what it is?) がもっとも頻度が高いこと、が明らかになった。

2. 研究の目的

「1. 研究開始当初の背景」で 2013 年～2015 年度の研究成果を (i) から (vi) の 6 点にまとめたが、以下の課題・疑問が残された。(i) Can you 構文、I 'd appreciate it if you 構文と I wonder if you 構文のデータ収集と分析はある程度完了したが、他の間接指令構文それぞれの高頻度の動詞とその用法にどのような特徴があるのか、(ii) 間接指令文の下位タイプ、例えば依頼型と提案型に何か体系的な違いがあるか否か、あるとしたら動機は何か、(iii) 命令文で頻繁に見られた tell と give の「動詞+1人称代名詞」構造は間接指令文でも同様に見られるか否か、相違点があるとしたら動機は何か、(iv) 英語指令文の選択についてコストと義務を中心とする申請者の仮説はどの程度妥当なのか。以上の課題・疑問に答えるのが本研究の目的である。本研究は、認知言語学の間接指令文の包括的分析を完成させて認知言語学の発話行為研究の基礎作りを目指すものである。

3. 研究の方法

このプロジェクトでは、まずアメリカのミステリー小説 29 編とアメリカ英語の大規模コーパス (COCA) という 2 種類の基礎データを用いた。ただしいくつかの構文についてはデータ数が少ないため必要に応じ The TV Corpus や Corpus of American Soap Operas などのコーパスを利用・参照した。本研究は、(i) アプローチ、(ii) 使用データ、(iii) 分析の観点、に独自性がある。まず (i) アプローチについては、認知言語学の間接指令文研究には Panther & Thornburg 1998 や Pérez Hernández and Ruiz de Mendoza 2002 及び Pérez Hernández 2013 などの先行研究があるが、個々の構文の選択の中心原理をコストと義務の力関係にとらえ、さらにコストの度合いを動詞のタイプと使用頻度・使用法とリンクさせる分析手法は当該分野で最初の重要かつ有効な試みである。また、(ii) 二種類のデータのメリットを活かすデータ選択法も特筆に値する。フィクション・データは完全な文脈 (とくに話者と聞き手の社会関係と発話の目的) を提供し、コーパスは大量データを提供し検索が容易である。そしてもっとも重要な

のは、(iii)異なる指令表現は命題内容自体が違うのではないかと、という分析観点にあり、本研究が先行研究と一線を画す点である。なお、当初の計画に含まれていた指令表現の談話中の生起位置と他の表現との共起関係の分析は2020以降の新しい研究プロジェクトに委ねることとした。

4. 研究成果

当初分析対象としたのは15タイプの構文であったが、I need you toとI'd (would) like you toは調査の過程の中で指令性が低いことが認められ分析から除外した。If you'll (will/would)はデータ採取が難しいため調査を保留し、Could youはCan youと顕著に異なる特徴が見られなくWould youもWill youと顕著な差異が見られないため調査を保留した。英語の主要な間接指令文10タイプの分析とそこから得られた指示行為についての知見・成果は以下のものである。

(1) Can you 構文について。(i) 英語の間接指令文でもっとも使用頻度が高い。もっとも使用頻度が高い動詞はtellであり、以下give, do, explain, help, get, talk, come, describe, makeが続く。(ii) tellは他のいかなる動詞より2倍以上使用頻度が高い。(iii)一般にtell, explain, talk, describeなどの伝達動詞の頻度が高く、収集したCan you構文のデータの三分の一は情報に関わるものである(例えばCan you give me/us more information?)。(iv) tellとgiveに加えhelpも1人称目的語をとる傾向が非常に強く、この現象は依頼の内在的特性である話し手の利益の反映ととらえることができる(Takahashi 2019a, 高橋 2017, 2018, 2019b)。

(2) Will you 構文について。(i) 使用頻度は第4位であり、もっとも使用頻度が高い動詞はdoで、以下come, help, marry, tell, take, go, give, haveが続く。(ii) Can you構文と比べると、do, come, help, tell, giveはどちらの構文でも使用頻度が上位だが順位に違いがあり、例えばtellはCan you構文では一番頻度が高いが、Will you構文では5位であり伝達動詞の使用頻度は低い。(iii) tell, help, giveは1人称代名詞目的語をとる頻度がきわめて高い。Pérez Hernández (2013: 142)はCan you構文に生じる1人称代名詞を受益者付随表現(beneficiary satellite)と呼んだが、この点はWill you構文でも同じ現象が見られるため依頼文に共通の特徴と言える。(iv)Will you構文ではcomeがgoよりはるかに使用頻度が高い事実はCan you構文と共通するが、これは偶然ではなく認知的動機がある。Will you come...という表現は一般に他者(=聞き手)が話者に接近するように指示する。この点で(goのように自己から離れる事態と比べ)自己に及ぼす影響が直接的であり、その影響は話し手の利益となる。この点で依頼のプロトタイプと深くつながっている(高橋 2020b)。

(3) Why don't you 構文とWhy not 構文について。(i) Why don't you 構文の使用頻度は第4位であり、もっとも頻度が高い動詞はgoである。Why not 構文の頻度ははるかに頻度が低いがもっとも頻度が高い動詞はhaveである。comeはWhy don't you 構文では二番目に使用頻度が高いがWhy not 構文では頻度が低い。(ii) tellはWhy don't you 構文では頻度が第3位で、(Can youやWill you構文とは対照的に)1人称より3人称の目的語をとる頻度が高い。一方で、giveはいずれの構文でも1人称より3人称目的語をとる頻度が高い。この事実から依頼と提案における受益者の違いが動詞の項の違いに反映される、という知見が得られた。(iii) Why don't you 構文は聞き手への提案だが、Why not 構文は主語が明示されないため聞き手だけではなく第三者への提案(WHY DON'T THEY?の解釈)や話者と聞き手の双方への提案(WHY DON'T WE?の解釈)が少なくない(Takahashi 2019b)。

(4) Can't you 構文とWon't you 構文について。(i) Can't you 構文は使用頻度が低くdoがもっとも頻度が高い動詞である。Can you構文ではtellを含む伝達動詞の頻度が高いが、Can't you 構文ではtellを含め伝達動詞の使用頻度が低い。(ii) Won't you 構文も使用頻度が低く、comeがもっとも頻度が高い動詞である。(iii) Will you 構文では頻度が高い動詞doの頻度がWon't you 構文では低い。(iv)Won't you 構文は、依頼だけでなく勧誘に使われる例が少なくない(Takahashi 2019c)。

(5) Would you mind 構文について。(i) 構文の使用頻度は低い、tellがもっとも使用頻度が高い動詞であり、この点がCan you構文と共通する。(ii)しかしtell以外は頻度の高い動詞がCan you構文とかなり異なり、物理的動作を意味する動詞の頻度が高く、伝達動詞の頻度はtell以外は低い。このため依頼のコストが相対的に高い。(iii) Can you構文とは異なり、聞き手に行為遂行能力がある時しか使わない。相手に従う義務があることを前提としないが、(話し手の利益だけでなく)聞き手の利益となる場合にも使われる(Takahashi 2020a)。

(6) I want you to 構文について。(i)この構文の使用頻度は第3位であり、Can you, Why don't youに次いで頻度が高い。(ii)もっとも頻度が高い動詞はtakeであり、以下be, listen, tell, go, meet, look, comeが続く。giveは頻度が低い。(iii) takeの多くが軽動

詞構文 (take a look, take a listen, take care of, take a bath, take a deep breath など) で使われ、とりわけ take a look, take a listen は会話の中で相手の注意を引く表現 (attention-getter) として使われる。(iv) 命令文との共起が多いが I want you to や I want to と共起する例も少なくない (Takahashi 2020b)。

(7) 対照言語学視点を取り入れるため、日本語の命令文と依頼文の動詞分布と使用法を調べた。すると、命令文の拡張用法は日英語間で共通点が多いものの日本語では命令形「しろ」「やれ」の拡張用法 (仮定的状況や反語を表す用法) が依頼形「くれ」より広範囲にわたることが判明した。この事実、*「くれ」*は話し手が他者から物を授与されることを意味する動詞「くれる」から派生した補助動詞の命令形であるため、「くれ」が DO THIS FOR ME という受給者・受容者としての話し手を強く喚起し、その結果、純粋な仮定的状況や反語用法への使用が妨げられる、と説明した (高橋 2017: 8 章, 2020b)。

上記の考察により、英語の主要な間接指令構文 10 タイプの実例データが得られ、それぞれで高頻度の動詞とその使用法の詳細が明らかになった。その結果、命令文との違い及び間接指令構文同士の違いが浮き彫りになった。具体的には tell は指令文でもっとも使用頻度が高い動詞だが、対照的に say は (英語一般でもっとも使用頻度が高いにもかかわらず) 指令文では使用頻度が低いことから、指令文と相性の良い (tell などの) 動詞とそうでない (say などの) 動詞が存在するという知見が得られた。さらに、Can you tell me と Why don't you tell me という表現は命令文 Tell me よりは頻度が低いが談話構成標識用法の存在が確認された。加えて、依頼型と提案型の指令文には高頻度の動詞と項構造に体系的な違いがあり、この違いは偶然ではなく動機があり、話者利益と他者利益の違いの反映であることを論じた。tell と give の「動詞 + 1 人称代名詞」構造は命令文のみならず間接指令文の多くで見られたが、個々の構文により生起頻度に差があり、Why don't you と Why not 構文の give は 1 人称より 3 人称目的語をとる傾向が強いことをつきとめた。最後に、(間接) 指令構文選択についての当該研究者の仮説「コストが高く応じる義務が低いほど指令構文はより長く遠回しになる」の妥当性が動詞の種類と用法の観察から裏付けられた。例えば、Can you 構文は I wonder if you 構文よりもコストの義務のギャップが小さく、I'd appreciate it if you 構文はコストの義務のギャップがさらに大きい。そして認知言語学のイメージ・スキーマの枠組みを用いると「コスト」と「義務」の関係は力の作用・反作用として捉えられることを示した (高橋 2017: 第 4 章)。以上の成果により動詞に重点を置いた認知言語学の包括的な間接指令構文研究が完了したと言える。本研究により認知言語学の発話行為研究の大きな発展が期待される。

< 引用文献 >

- Austin, J. L. *How to do things with words*, J. O. Urmson (ed.) Clarendon Press, 1962
- Panther, Klaus-Uwe & Linda L. Thornburg. A cognitive approach to inferencing in conversation. *Journal of Pragmatics* 30, 1998, 755-769
- Pérez Hernández, L. Illocutionary constructions: (Multiple source) -in-target metonymies, illocutionary ICMs, and specification links. *Language & Communication* 33, 2013, 128-149
- Pérez Hernández L. and F. J. Ruiz de Mendoza. Grounding, semantic motivation, and conceptual interaction in indirect directive speech acts. *Journal of Pragmatics* 34, 2002, 259-284
- Searle, J.R. *Expression and meaning: Studies in the theory of speech act*, Cambridge UP, 1979
- Takahashi, H. *A Cognitive Linguistic analysis of the English imperative: With special reference to Japanese imperatives*. John Benjamins, 2012
- 高橋英光、英語の命令文 神話と現実、くろしお出版、2017
- 高橋英光、認知言語学はどこへ向かうのだろうか、高橋英光・野村益寛・森雄一 (編)、認知言語学とは何か あの先生に聞いてみよう、くろしお出版、2018、223-242
- 高橋英光、言語行為と認知言語学、辻一夫 (編) 『認知言語学大事典』朝倉書店、2019a、598-608
- 高橋英光、なぜ認知言語学にとって語用論は重要か—行為指示の動詞と項構造、森雄一・西村義樹・長谷川明香 (編)、認知言語学を拓く、くろしお出版、2019b、171-189
- Takahashi, H. A usage-based analysis of the *Can you* request construction, Ms, 2019a
- Takahashi, H. A usage-based analysis of the *Why don't you* construction: With special reference to the *Why not* construction, Ms, 2019b
- Takahashi, H. A usage-based analysis of the *Can't you* and *Won't you* request constructions, Ms, 2019c
- Takahashi, H. A usage-based analysis of the *Would you mind Ving* construction, Ms, 2020a

Takahashi, H. A usage-based analysis of the *I want you to* construction, Ms, 2020b
高橋英光、日本語の命令文と依頼文、池上嘉彦・山梨正明（編）、言語研究の革新と継承、ひつじ書房、2020、319-417
高橋英光、動詞と談話文脈から見た Will you 依頼文 発話行為と認知言語学、児玉一宏・小山哲春（編）、認知言語学の最前線 山梨正明教授古稀記念論文集、ひつじ書房、2020b（掲載決定・ページ未定）
Wierzbicka, A, *Cross-cultural pragmatics: The semantics of human interaction*, Mouton de Gruyter, 2003

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 高橋英光	4. 巻 なし
2. 論文標題 動詞と談話文脈から見たWill you依頼文	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 認知言語学の最前線 山梨正明教授古希記念論文集（ひつじ書房）	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋英光	4. 巻 なし
2. 論文標題 言語行為と認知言語学	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 認知言語学大事典（朝倉書店）	6. 最初と最後の頁 598-608
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋英光	4. 巻 なし
2. 論文標題 なぜ認知言語学にとって語用論は重要かー行為指示の動詞と項構造ー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 認知言語学を拓く	6. 最初と最後の頁 171-189
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋英光	4. 巻 II
2. 論文標題 日本語の命令文と依頼文	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語研究の革新と継承 5 認知言語学	6. 最初と最後の頁 319-347
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋英光	4. 巻 なし
2. 論文標題 認知言語学はどこへ向かうのか	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 認知言語学とは何か あの先生に聞いてみよう(くろしお出版)	6. 最初と最後の頁 223-242
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hidemitsu Takahashi	4. 巻 36-1
2. 論文標題 Review of Cognitive Linguistics: SAGE Benchmarks in Language and Linguistics	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 English Linguistics	6. 最初と最後の頁 115-128
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hidemitsu Takahashi	4. 巻 35
2. 論文標題 Expressions of Directive Speech Acts Revisited	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 JELS	6. 最初と最後の頁 308-314
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋英光	4. 巻 16巻
2. 論文標題 Cry me a river.はなぜ適格かー英語の二重目的語構文と命令文の融合がもたらすもの	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 日本認知言語学会論文集	6. 最初と最後の頁 152-163
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋英光	4. 巻 -
2. 論文標題 I wonder if youとI'd appreciate it if you 依頼表現と依頼内容	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 言語学の現在を知る26考	6. 最初と最後の頁 254-264
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 高橋英光
2. 発表標題 行為指示表現における動詞と二重目的語構文
3. 学会等名 日本英文学会九州支部大会第72回大会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hidemitsu Takahashi
2. 発表標題 Verbs and ditransitive argument structures in directive constructions
3. 学会等名 GRATO 6th International Conference on Grammar & Text (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hidemitsu Takahashi
2. 発表標題 Verbs and argument structure in directive constructions
3. 学会等名 Tenth International Conference on Construction Grammar (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hidemitsu Takahashi
2. 発表標題 Expressions of Directive Speech Acts Revisited
3. 学会等名 English Linguistics Society of Japan, 10th International Spring Forum 2017年04月22日~04月23日 明治学院大学(東京)(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Hidemitsu Takahashi
2. 発表標題 Choosing an expression of directives: An integrated Cognitive Linguistic analysis
3. 学会等名 The 14th International Cognitive Linguistics Conference 2017年07月10日~07月14日 University of Tartu Estonia(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Hidemitsu Takahashi
2. 発表標題 Are imperatives really “prototypical” commands?
3. 学会等名 15th International Pragmatics Conference 2017年07月16日~07月21日 Belfast waterfront Conference Center Ireland(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高橋英光
2. 発表標題 なぜ認知言語学にとって語用論は重要か 「認知語用論」から「語用認知言語学」へ
3. 学会等名 成蹊大学アジア太平洋研究センター シンポジウム『認知言語学と語用論の接点』 「認知言語学の新領域開拓研究」2017年08月29日 成蹊大学(東京)(招待講演)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 高橋英光・野村益寛・森雄一	4. 発行年 2018年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 252
3. 書名 認知言語学とは何か あの先生に聞いてみよう	

1. 著者名 高橋英光	4. 発行年 2017年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 169
3. 書名 英語の命令文 神話と現実	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	大橋 浩 (Ohashi Hiroshi)		
研究協力者	長谷部 陽一郎 (Hasebe Yoichiro)		